

黒幕

黒猫麗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界一平和で、自然豊かな日ノ島。

そんな島に、とある五月——殺人鬼と呼ばれる犯罪者が現れる。

それから一年——警察のもとに届いた一枚の手紙で、闇へと巻き込まれる若者達。

謎と謎が絡み合う アクションミステリー小説。

目次

第1話

序章——事の始まり——

夜。

雲ひとつない、静かな空。

何処からか、狼の鳴き声が聞こえてくる様な、恐ろしい程青白い満月。

此処、日ノ島で 一際目立つ山。 寂静山——その麓。

道の直ぐ側の林の陰。男、一人。

その男、黒いマントに身を伏せて深くフードを被り、まるで木の影の様に、身じろぎひとつしない。

この男を、ひとまず『彼』と呼ぶ事にしよう。

其処へ、揚々と七人の若い男女が歩いて来た。

彼が隠れているとも知らずに。

「あゝあ、今は涼しいけど、後一月经ったらじめじめするから嫌だねえ……」

「桜も散ってしまいましたしね……でも今年は綺麗だったわ。」

「僕達、日ノ島の人達だけだよ、桜を存分に楽しむのは。近くにある都島の人の中では、桜の名も知らない人がいるんじゃないかなあ？」

「まさかあゝ」

歩きながら、談笑している。

すると、身じろぎひとつしなかった彼が動く。懐から、黒く長細い物を素早く取り出した。それは、鞘に収められている短刀。

彼は、鞘から刀を静かに抜いた。金属製の鞘と刀が擦れ //

と音が微かにする。

今、七人の人達が彼を通り過ぎようとしていた。

突然、彼は行動に出た。

誰にも気付かれぬ様、足音を立てず、通り過ぎた人達のうしろにまわる。

手元の刀が、月明かりに照らされ 鈍い光を放つ。

七人は、まだ彼の存在を知らない。

彼は、最後尾にいる男のうなじに刃先を向け、男が驚く間も無く、斬り裂いた。

そして、続けざまに一人、二人と致命傷を負わせる。

三十秒もたたずに、最後の一人をも斬り裂く。

斬り裂かれた人達は、深くフードに隠れて見えなかった、彼の目を
見て背筋が凍る。

その目は、まるで自分の心を見透かされている様な、深く 暗く
青い目をしていたので。

用事を終えた彼は、血だらけの短刀を懐に戻してあつた鞆に収めて
山の中へと消えていった。

——五月の出来事である

日ノ島——其処は、世界一とも言われる程の、平和な島だ。それ
と同時に、自然がとても豊かな島でも有り、電気もガスも通らない田
舎な島でも有る。

村では、自然を生かした木造の建物が並び、落ち着いた雰囲気は漂
わせている。

春には、山も並木も地面も、桜色に染まり、

夏には、青々と茂る木々、色鮮やかに咲いた花が顔を見せる。

秋には、何処もかしこも 色とりどりの葉が落ちていて、

冬には、一面銀世界で 雪の積もった地面には、兎や猫、鹿などの
足跡が続いているのだ。

そんな島に、一年前の五月——突如現れた、殺人鬼。

それ以来、満月の有る日の夜になると、再び姿を現しては 人のう
なじを斬り裂き また何処かへ消える、と云う前代未聞の事件が多数
起きた。

それから一年。

警察署に届いたある一枚の手紙で、闇の世界へと巻き込まれる若者
達。

だが、この話は氷山の一角にすぎない。

——その闇にまだ光が差し込んでいた頃の話だ——